



生暖かい風



川崎ゆきお

いつもの暑さではない。

高田は熱が出ているのだろうか、額に手をやる。だが、熱くはない。

真夏の暑さは峠を越え、秋に向かっていく時期だ。

寝る前、テレビを観ていると、急に暑くなってきた。暑さ対策は開け放った窓と扇風機だけ。それで何年もこの部屋で暮らしている。

窓からは風が入ってくるが、生暖かい。扇風機からの風が暖風のように感じられ、スイッチを切った。

こんな暑い夏は初めてだ。しかも残暑の頃で、朝方などはひんやりとし、掛け布団を使うほどだ。

温度計を見ると、それほど高くはない。昨日と同じような温度だ。それなのに昨日は、これほど暑くはなかった。

高田は部屋の中にいると、蒸し焼きになると思い、外に出た。すると、同じように涼みに出ている人がいた。

夕涼みではなく、もう寝る前なので、何涼みというのだろうか。しかし、あまり効果はない。風はあるが相変わらず生暖かい。

「もうそろそろ出ますよ」

顔だけ知っている近所の人が、ぽつりとそう言うが、高田は無視し、広い道へ出る。

すると、風が気持ちよく、汗も引き出した。そのまま、通りを歩いていると、気分が落ち着いてきた。逆に寒いほどだ。汗で濡れていた衣服が冷たく感じられる。こんなことをしていると風邪を引くと思い、引き返すことにした。

「今夜は出ないようですね」

先ほどの老人がそう呟いている。それに答えるように、もう一人の老人が頷いている。「どうかしましたか」

「大通りの方は出ないです。この一角だけです。しかし、せっかくの予兆なのに、出ません」

「何がですか」

「幽霊ですよ」

「はあ」

「あなたもそう感じて、外に出たのでしょ。室内で出ないとなると、屋外ですからなあ。しかし室内でも出ないし、外でも出ない」

「幽霊がどうかしたんですか」

「この辺りは、ややこしい場所です。まあそれは禁句なので、誰も口にしないけど。でも知っているんですよ。私ら年寄りには。出る場所だってね」

「幽霊は、まあ置いていて、この暑さ、変ですよ」

「それぞれ、生暖かい風」

「はあ」

「前兆ですよ。生暖かい風が吹けば、幽霊が出るんです。決まりなんです。それで、私ら、幽霊見物と洒落てみたんですよ」

高田は、老人達の話は無視し、部屋に戻った。

すると、あの蒸し暑さは消えていた。窓からは涼しい風が入ってくる。だが、温度計の数値はそのままだ。

何かよく分からないが、風邪を引くと思い、肌着を着替え、再びテレビの続きを観た。

とりあえず、あの暑さは去ったので、一件落着なのだ。

了